

# 第2回ウェッブアイカップ

1月13日 / 新小岩サニーボウル

## アマ同士の優勝決定戦はプロ顔負けのストライクの応酬に!



▲庄巻の投球で優勝をさらった斎藤選手。最後の一投を終え、笑顔でギャラリーの祝福に応えた



▲1~3位入賞者とウェッブアイ・森川社長。プロ最上位は第3位の呉竹プロだった

株式会社ウェッブアイが主催し、日本ボウラーズ連盟(NBF)が後援するJ P B A 承認試合「第2回ウェッブアイカップ」が祝日の1月13日、都内葛飾区の新小岩サニーボウルで開催された。ちなみに、ウェッブアイは企業のプロジェクトマネジメン

トを支援・サポートする創業20年目のソリューションプロバイダー。同社の森川勇治社長は、70年代ボウリングブームの直撃世代であり、自身NBFの会員として年間2000~3000Gを投げるといふ筋金入りのボウラーでもある。

今大会には総勢105名の男女プロ・アマボウラーが参加し、競技は年齢性別ハンデありの混合戦で行われた。昨年1月に東京ポートボウルで開催された第1回大会は、藤井信人プロ(52期)が制したが、今回の出場プロ29名(男子22、女子5、K P B

A2)は軒並み苦戦。予選6G・準決勝2×2G(0スタート)を経て呉竹博之(43期)、永野すばる(40期)、津島悟志(43期)、谷合貴志(52期)の4プロが決勝シュートアウト(1×2G)に進出したものの、そこで枕を並べて討ち死に。優勝決定戦に勝ち上がったのは、ともに20代の精鋭アマだった。

だが、斎藤祐太(JBC/右投げ)、東海純(千葉商科大/両手投げ)両選手による頂上決戦は、プロ顔負けのストライクの応酬で白熱の展開に。スプラッシュの快音が響くたびに、会場は大いに沸いた。

結果は、4連発スタートのあと、5フレの⑦⑩スプリットオープンを含んで6連発を決めた斎藤選手が265のスコアで快勝。東海選手はノーミスで

245を打つも2マーク及ばなかった。

大会中(予選終了時)にはジュニア教室も開催され、出場プロが未来のライバルたち?と2Gを投げて交流。表彰式後、挨拶に立った森川社長は「来年はさらにスケールアップして」と、第3回大会の開催を公約した。



▲総合12位の熊本美和選手に賞品のボールを手渡す鈴木馨プロ(51期)。大会の企画・運営責任者としてフル回転だった



▲NBFのスタッフから贈呈された花束を手にニコリの白石氏

昨年88歳の誕生日を迎えたNBF・白石雅俊理事長の「米寿を祝う会」が1月25日、東京

ポートボウル内のレストランに新旧120名の関係者・友人が集って和やかに催された。



▲謝辞を述べる白石氏(中央の後ろ姿)。被っている中折れ帽は参加者からの祝い品として、会費の一部を充てて購入されたもの

### 白石理事長の米寿を祝う会

## “ボウリング界の生き証人”は今も意気軒高!



▲今年米寿を迎える大蔵満彦氏(=右/大蔵映画社長)は、T B C 時代からのボウリング仲間であり、盟友だ

同会は、戸田幸一郎、坂田正祐、泉成光のNBF 副理事長3名が発起人となって、当初は昨年10月12日に同所で行われる予定だったが、台風19号の関東直撃によって中止を余儀なくされ、この日改めての開催となったもの。

白石氏は1931年(昭和6年)10月1日、東京都渋谷区の生まれ。52年に開場した民間初のボウリング場・東京ボウリングセンター(T B C / 港区南青山)のピンボーイとしてスタートしたボウリング人生のキャリアは、



▲会の中盤には白石氏の足跡を辿るスライドが、本人の解説付きで紹介された

67年の長きに及ぶ。まさに“ボウリング界の生き証人”だ。

その黎明期には、自身トップボウラーとしても名を馳せたが、56年、報知新聞社に入社して広告営業マンに転身。そこで得た数多の人脈をボウリング界につないで業界を陰から支援する傍ら、一ボウリング愛好家としてボウラーの組織作りにも手弁当で奔走した。

78年には独立して広告代理店を設立。ボウリング以外にも、プロ野球セントラル・リーグの指定代理店として、球界の発展

に尽力したことは周知の事実だ。

日本ボウリング場協会の中里則彦会長曰く「人に対するジャッジが公平」な白石氏の周囲には、老若男女、業界の内外を問わず、今も多くの人が集う。

閉会前、謝辞に立った白石氏は「ボウリングがボクの人生を大きくしてくれた。これからもボウリングの輪を広げていきたい。みなさんも一緒にがんばりましょう!」と、参加者に向かって意気軒高に語りかけた。